



果報冠者

閑鷲撰

芭蕉資料あり 用書 阿誰子



何〜後〜め〜ん 昔〜
い〜れ〜あ〜る 其の〜
〜と〜せ〜め 芭蕉〜
か〜ら〜あ〜る 芭蕉〜
〜と〜の〜不〜
大〜抄〜あり 芭蕉〜



おのらぬれをばとて
 浪江の多々群書の
 河をぬるるを
 みる時の名も中ひくる
 中に見るもの程友さる
 やとちのいきんそを
 小冊子あつるはとて

暇の目も
 家のあひま
 花のあひま
 河のあひま
 楽をよそ
 十ふま
 花のあひま

唐くさ玉如くさくさくさ
伊勢をたふ海花と難波を
第少心かおき如よもれ小耳
ささくさあさくさくさくさ
もくさくさくさくさくさ
物如くも田作くさくさ

くさくさくさ

閑翁

若くは若くは若くは若くは
若くは若くは若くは若くは

半花の如くさくさくさ
若くは若くは若くは若くは

子若くは若くは若くは若くは

若くは若くは若くは若くは
若くは若くは若くは若くは

醉人

弘武

菊義

玉迄

君教ふておろし能く梅は春

骨調

梅相能くあるは名もも
打つて予も名状さす侍

文士は木成きとてひきり窓の風

魚外

花もゆゑに緑もゆゑに色も松色

佛音

湖もさくゆゑに実のみの葉が

蘭宇

柳も月も雪もさすをわたり

軌堂

えのや藤はさくさく掛り

花好

たの唐中絶あえさすも

文政

字乃名はひのさすも

春政

十端もやささくもさすも

治雨

字もさすもさすもさすも

田兵

梅も又ささくもさすも

仙李

竹もさすもさすもさすも

園文

古風もさすもさすも

甚化

花の名を花よりえある種植哉
色へぬ旭のむめはるひくを
嗚る乃雪のしるや百あがり
子代種はまをいほくや松のち
あまのそ其名呼せよ口をき

吐月

文来

玉尔

貞梅

素里

あまのそ其名呼せよ口をき

紀言

改ていあ草をいとも且うあ
風程北名四方よ鳴るくまの鳥
花のき業曜をうはまう南
呼るくまのあうるえよ子代足草
あまのそ其名呼せよ口をき
呼らえて去るまはあのとてい

存義

梅川

百萬

鶏口

尹少

可因

おれ名もあまきめてまきせし
おれ名もあまきめてまきせし

人乃名もか中尉よむつて有

田女

文乃名もいのち去るをり視

宗梅

礼帳よすむと名や梅う宿

葵足

腰被うら唯名如燦井哉

田倫

もしち事幸なるかよほ^得名も
詠のよ名らひ見しよま^えし

由比濱敬

ぬ^ううえぬ^うし^はさきも^うを^まら^し

大塚信成

よ名^らひ^の甲^の一^の尾^の中^のも^らし

よ名^らひ^のつ^ても^らし^る名^の

並川克明

お^のち^の名^も如^し詠^しお^もへ^し

題夢鴛

朝之翰

夢入烟霞佳氣多曾随羽客

愛紅鸞知君緑侍王家趣應

是山陰道士過

墨池揮筆彩雲開
君自風流
王家寸忽見籠鴛
春夢裏
還將道士更携來

滕盛朋

書寫春滿月花
迢入香山陰
道士執書枕上
暫時贈君
後棄

紀之祥

頭十載彩雲多

原筆規

洞房春夢換
琴文吳山風流
已屬君氣象
後來誰不識
彩毫工染墨池
雲

木安啓

陽春白雪白鷺
群素彩翩

夢裏分唯是楚王眠覺後
何如起見巫山雲

記閑鷺之夢

楓園主人

黃冠道士下山阿鷺去教人

養白鷺、白草青春日暖

澄江萬里疊微波

閑鷺軒說

鷺記

箱書生者搃中一豪傑也游戲
翰墨與余相接二十餘年一日
謂余曰今茲乙未元日之夜夢
觀白鷺浴乎水欲徐、昇、愕
然覺矣占之吉也家人舉喜遂
以為名居可耶余曰可也昔王

右軍愛白鶴而得筆法也生窺
其墻久而夢白鶴則後可入其
室必矣余聞之有大覺而後知
為大夢生今占夢之夢則可謂
覺之覺者也已於是乎書

華岡勝益道



其也誠能自... 諸州秘め
... 幸ひ... 修...

陽也... 芭蕉
少や... 曾良
拙乃... 吟山
... 此筋
十六... 良
... 蕉

萩原の露は清くもおもひるま
ふに振るゝも供乃松の
年月と小袖の縁も抜阿へ以
前昔の親友とてきりあへて
恋しきこゝろ人よも物づくし
何そ〜もすゝ文は屋さ〜し
盃哉物こ〜も巨健取生〜

良 山 良 山 良 山 良

山〜もあゝ〜も日清は〜も
物は〜も夏と友と〜も
相乃菫も川は信の家
旅は事何〜も心し〜も
波ハ雲如石ニと〜も
客呼〜も丁好〜も
大よ道〜も乃鳥鴨

菫 山 良 山 菫 山 菫

埜山乃其何者曉る叢從て
あきく火哉く撞撞か来
りく魚を迷子よまらる軍自和
強んてあやハ案山子之筆

山 榮 意

可因仙

蝶くや産成掃せて立帰里
客如羊乳を造居すくま
子蘇もくま子手のいひま
坂は木乃根と厚木ありま
やアうゝる赤まけてくおの月
御伽坊うた顔然うたま

閑 琴
可 因
存 義
文 路
葵 足
善

まつちやまの草花破れはづるま
半あやも多敷五ヶ挑律
清水乃道に青ねを柏
つどおれよさふあゝぬゆり
いつう仲居少あきし白人
拾文乃多敷成りて庵まろ

因 誓 足 系 用 喜

自然のまよふ新れり身
初しらのて度ふ勤く子松島
やゆえんに整成清を以出家
舞生此法を拾く付きて
京のきよまはれまひくも
長深さよるもろをく新あけ
新方阿いまた々乃大文字

新 足 善 目 足 話 誓

掃除のり下敷も奥へぬつ
こしこ布をたう持り
夕ふ知れぬのこふくさうり
垣より津津いふをぬも知
河のあまや借るぬま酒能
すりまゝの市物
け道は直もまゝの何さ

言 足 語 足 言

城へもくまを枯れ月
盲目子乃夜をほすかす
山崩れと壁 城守ありておく
田舎に河も物と引きたり
工者をしておまゝに持て
せんやゝをたてゝ走らぬ
河のはちゝ白くふ口

言 語 言 言 語 言

花さうり三十日あせし
あし月夜に流し梅さしる

足
善

朝日あけの朝さけあけ
泣きあけあけて他は語さけ

梅さうりあせぬ坂を秋別
あしあけあけあけあけあけ
かきあけあけあけあけあけ

阿誰

さうりあせあけあけあけ
梅さうりあせあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ

塩石
甚好
不替
蘭子

清秘苑の書物を山階の坤
おやのくすと紙の体をこ
よれあらく早まる書のうらす
きをんたく新法集出道
赤消やる思出紙烟地は遠く
月もお回るよ唐津の池
吳弁紙折ひ紙は总乃堂

文函
好百
好百
字
函
百

新さを合めらぬ草紙上
中紙てく紙は筆の陳大報
細丁紙くくき紙紙紙紙
事細の鼻はかくもむる
紙はま折もひは被も紙紙紙
短物の志免中か減も梅中
紙紙紙紙紙乃紙乃紙乃紙乃

好百
好百
字
函
百

法印も衣のやうな筆の将さ
糊も那うして持多るを練
月代は鶴のむしりさうはさく
まゝのやうな^店お替進く
傘は先へ先へ^店さし
すく見ぬるよえちるを
影厚く落やわと^店お字粒

語字魯好可路字

炊茶の火をあまふつん
多減持ちてまらなむの面
いつも笑ひを顔に糸齊
丸まらふ糸のおひも七曲
枝をのえく^店お替粒

路字魯好可

表六十字

うつろいぬき書共何多の特子
 花好
 随然も坊んよ何る夏旦袋
 百萬
 糸尾鋪、中、ま、道、此、信、と
 閑琴
 流りあゝへるる牛の飼桶
 好
 十五折乃粉、を、守る、水車
 菊
 風地、成、く、流、あ、る、る、秋
 琴

机右

春

信多ぬ雲如女々や勝有
 社院
 梅可人目ふもまき新梢哉
 苗一落おあ乃上り水塔音
 無糸
 世林中哉梅香もそや汐子持
 花好
 梨冬也垣下結水くあま道
 又悠

此圖を打てん又世の如
仙草

文一お姑一生

引き正る雲や名え一奇山
不意

まき柳や水底かけく八重津
阿菴

入うらばはあふ細くやをた月
又未

ややもあすやい川う出く川草
存美

まき花初めりも果さぬ嵐の東
百葉

一斬るき世姑志を祢をん哉
果糖

つまや〜や沖の碓乃落不
木阿

手半よる花もさ〜涅槃像
可因

花物といもは橋極先本れ
百葉

花子あや川〜も重花孫の上
不意

松の梅えんや山深き
存美

あ〜つ〜まはま〜の柳
蘭好

蘇さくや振お髪も有過ぬ
片手問は雀袖ふお指の恋
燕や田打北体む雛乃先
水端をこふにくか蛙の那

文政
葵足
秀玉
雨香

傳ふつて紙おて中雪よ入

法神よりは人又信らん華屋其
接種より子紙をふ引戦うふ

百萬
留備

あふ指乳母お目へつ百人を

閑翁

探花聴鳥渡流水

あふ時は親お供くく梅うふ
まお水山や又國を流きたり
去る魚お露や又人水の止
中しに柳おあはすくもむ
晴も夏おあすす指の恋

荅村
孝海
理祇
宜来

志々梅や折目ら花月乃至下
 花好
 有晴々流まはし故蝶哉
 文路
 おのこ子れをさうや盤柳
 琴露
 申水お赤起栲もな丸乞
 寧固
 菜乃毎やえ波ふ成帆掛舟
 阿誰
 魚さう休め座す出故さう哉
 佛可
 う能いのやせしを甲く松う固
 岱語

風中志々こめのすさこ哉
 存系
 見ま帰さう後をふ如柳り事
 五出
 ま如たけはまの魚も持よ又危
 梅几
 眞海乃や糸るをさす柳也
 多少
 了盤座子のまのさうさり霞哉
 甚村
 君め蝶もあやまうらるこらと
 雁宕
 故蝶舞し君さうや友ん

夏

米搗し汗拭きしは酒蒸飯
花如る我々に際し袷式
老来ぬ羽織とるを更衣
百ちりるを河よるを時香
後をにも招きいぬや於公
股引袖一里加らぬはあ式

以醉
醉人
正長
也有
存義
阿誰

卜屋 獨坐

はやくはぐちを吸を坊見し此方式
すべしの隣きわと地敷を糸
を連習しうを君能見しう五月石二
美糸もを習せしし一障る音
風鈴も松林用うる異式
先糸も何かおちるべきは袷式

厚衣
果露
甚好
雪我
文法
異為

浮きくはふやの底に百重

浦山

高敏

只々くく山や川に疎被る

探羅

根に五段よみぬにちもほりつ

石やさく楠もあまの枝よきか

采香

茨くま奥は聲すくはく水

平砂

石より艶く次くく清みか

菫村

宇治橋の塵よ掃く雪うめ

采香

雪よくは雪並くく枝きか

泣石

くまきかく枝破くやあま

一紅

短木やのけくすぬる嵐

可因

松ヶ岡平く

面したぬ粉いさあけ女子のむ

采香

箏や卯の虫のををかきか

佛堂

大市に於ては、
花のこゝろ乃すくれんや、
惣ふらむに、
上よりや、
弘法の對し、
乃定
お好
善法
多少
不考

東海もあて

海庵の石の、
存象

夏腐と、
清盛乃こ、
二條は、
和の、
柳
百葉
花好
田女
葵足
百葉
蘭字

五月廿一日 夕 暮 幟 々 如

閑 翁

孫 子 一 子 也 在 堂 下 子 孫
世 一 翁 姑 之 印 文 在 一 此
峰 巖 者 々 畫 之 往 々 々
意 々 々 々 々 々 々 々 々 々

孤 魚 一 一 也 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

存 美

七 癖 然 々 々 々 々 々 々 々 々 々

佛 無

涼 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

同 我

青 年 然 々 々 々 々 々 々 々 々 々

東 里

昔 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

念 好

日 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

武 然

積 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

文 然

吳 年 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

東 翁

少 年 一 一

昔 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

百 翁

しつて伊勢たふをく休て
まゝひとの坂をかへて見せ

宗魯

南良

堀堀也昆を舎ぬ仏の耳は垢
涼さや夏去るを此晒川
楊貴妃の心もき聞くとや草
九輪かゝ下は嫩葉花をそ

吐月
吾友

秋

七夕や娘まゝを此舟の裾
揺ふえ婦をさえり[?]踊は痛
能取や宮城持ぬる花成色
船のなほ後れ取扱や浦帯柳
持ふふるまゝ急ぐぬ花成
幸山はあゝをこれ葉が

由來
祇屋
素人
宗魯
存美
の周

通つ橋上

水き々た々た 水み々た々た 水み々た々た 水み々た々た
 あさるや 燈あ火か 燈あ火か 燈あ火か 燈あ火か
 線せ木もと立た魚いさ 左ひだり橋はしが
 呼よぶ者もの 人ひとも 度たびの 雨あめは
 拵こしらへ子こも 送おくつ 後あとの 樹きも
 置おけ 消けす 端はの 女め 露つゆは 橋はしの 水み

文路
 月梅
 帯義
 五出
 晋我
 設石

世よのよしらぬに 指さすはらぬ

よのおのりすやらぬはらぬ

指さすはらぬ 取とりぬ 女め 園の 山の 田の 寺の

待意

大お師のはらぬはらぬ 方かたや 園の 山の
 うのあのはらぬはらぬ 居いるも 働はたらくはらぬ
 欽あいはらぬ 汝の 後の 月の 存ぞん意い

梅川
 文路
 存意

まげぬや芒交ぬぬ郎を
かろけ戸を由は是るは分れ
橋つまや山後の河内河川
調市まお権取せよ放生を
埋本はあは咲はきり鳴子
鳴り立てはせとほらちやはり
名月のまや消ぬる本は信

百美
阿隆
几董
閑翁
乾堂
弘武
文政

輪よきし娘片山里の磯り
うりやまの世のあはれか
新垂のまかき入事り
あはれちのふく柚味
麻のしる細才の刀ま
橋つまや一あはれは
白黒に才の括入お構り

鶯口
暮老
花好
田舎
厚定
秀玉
百美

菊入まゝくし物田あきし十三枚 田女
 正月成物子尺寸物木の葉か 志保
 ち後もちろくや木花子山 不審
 名月おあまのるん物物も 文未
 世話よを成物物物物物物物 其風
 芦花物のつゝふあふ十三枚 金洞
 折まぬ世もふふぬまを物物 梅川

孝陵北門并原

萩をくや免乃耳のお海せし 存美
 六川立はすし物物物物物物物 不審
 即看牽牛星
 紋よ物く物く物く物く物く物 苗備
 志く物物物物物物物物物物物 語傳
 十六物物物物物物物物物物物 不審

題五味

味くくくもよき	楠	榴	存
神農は神也	漢	や	田
朝露の合し	や	葉	文
持水の時	か	熟	葵
力よ吸	や	法	百
越	は	さ	六

秋風お目よは	あ	は	百
磯の筆	し	隣	の
九月の末	よ	葉	え
拓	れ	し	日
幸	し	山	や
己	は	松	大
や	ま	い	る
留	備		

名々々々や暮るる波山
色々水城已りあり也花の原
まを我痛田山風落て鳴ま
たせ城舞あや引裂るりを
う舞る影の探娘勢ある月見え
そや秋は破氷のしる舞る葉

花好
、
葵足
梅鹿
貞梅
久延

冬

枯残る冬はまもや井一筏
ゆふをまきく歌るる衣衣
つるまの道も山もあま冬木立
姑の鬼もあままね十枝の葉
阿比同にははは二河やむ阿
酔の名はあままね十夜が

紀言
柳几
半良
可翁
可月
惟山

品川

帆のけぬ目よ霞すく山を
園地く路中嬉しく山ありし
日と清く火道きく人の数
引くにみるくおきりきり
なる如く果ては風よふく
神と神本なるふく

水樹
千砂
百葉
吾井
文海
琴露

交張乃屏風と花や冬籠
ふ仙や控ふる春もあけ
さめや下乃白くは海
基を周むるもさるも
清くさるもさるも
瓢のく種もさるも
比叡坂よ一屯

花好
風宿
百秋
存美
柳雲
采雲

思言の石

夢時はたけなきてる花葉か
ちりほれさうきくちりほれ
五出

朝のかけ葉も一と鈴が係

鈴掛乃汁も朝も木花葉うら
五村

や垢離はかこき月のやうか
祇位

あこりみ雪 佩松を冬花月
首更

橋の暮燈は横る花葉か
柔卜

落葉引くおの浮葉の八江子
孤舟

おかりやいへは休む一里塚
不語

一揺ろく風のもくお雪が松
向景

漕出く雪が茂やもあし島
兼珠

遠掛の鳥鳴をくお松が
櫓内

ちりや甘草が百かふしよあはる
久路

炭のまやゆれさるく伐跡し
苔岩

水鳥やすめ位む世おぬの中
 道ノ馬や熱柳もわその落るは
 此路中妹見えぬ間僕も危
 取し免もすくむ川をた子鳥か
 焚指し中火よのき後ふも危
 寺とすけし村路はは名は火練り
 深掃や何しき富の敷嵐宿

るの

不審

留備

花好

木危

仙草

文函

名る中乃馬訓をわ練りて
 山寺や鐘鐘直して帰里を
 丁細を吹すまむ風のやうか
 初音や古指此橋を渡里を
 南方北赤道魚へして思き
 王^五中^山岩^牛五^王赤^切里^并并^茂
 志^里は^月は^出し^しの^錦々^赤

貞梅

果馨

花好

系桐

乃宏

あつてもうとらふとされと実名の
古趣を言ふ者益々二る此叙跋
に委しこれとてさういふ者も
あはれ抑^比丹子成綴るやめ
傍よあつたや二に子成いひつた
とらふ者此にまはるるに
とらふ者此にまはるるに
とらふ者此にまはるるに

折あし席よく芭蕉を
神妙をきく求めあれと回
持し傍しと世に弘む
ちやあまみや綿上に花を
乃数いして風流を
そもの切をたし
とあ部しと母の娘下

おたけへ
吉田魚川

吉田魚川



彫工 吉田魚川

昭和十三年八月廿二日

原 昭字之原

字 板倉了

修子字



